

午後

真っ白い心

不思議だけれど

打ち棄てられた痛みはない

予期していたからなのか

歪んでいたからなのか、それとも

不相应すぎたからなのか

夏を予告する陽射しが

廊下の床板に反射している

静けさの彼方から渡ってくる音がある

かつて認識と定義が存在していた

世界を構成するものとして君臨していた

暴力的な威力を有していた

見ること、と

見えること、と

見せられること、の違い

我々はCPUではない

単なる創造者に過ぎない

その暴走に耐え切れるはずもない

もしかしたら

失われたものは

何一つ無いのかもしれない

生きるなどとはおこがましい

暮らしてゆく、ということ
そういう午後です

(2013.5.9)